

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

大場先生、がん治療の本当の話を教えてください
大場大著 扶桑社 2016年11月初版

はじめに

昨年11月のニュースレターで廣川先生が紹介されていたように、最近、「情報リテラシー」、「ヘルスリテラシー」等、「〇〇リテラシー」という単語をよく耳にする。
「リテラシー(literacy)」とは、文字の読み書き能力(識字能力)という意味である。今日、有り余る程の情報化社会となり、玉石混交の情報が飛び交っている。よって転じて、情報を正しく読み解き活かしていく能力という意味でも使われるようになった。

本書ではズバリ、「がんリテラシー」という言葉が使われていて、序文では、「ごく一般の方のがん医療に対するリテラシーの向上を願い書き著した」とある。九つの章から成っていて、がんとは何か、三大療法に関する事、そして効果のない先端医療、免疫療法、サプリメント等多くの話が取り上げられている。

さらに、情報源として多用されているインターネットを、どのように使えばよいのかにも触れられている。そして米国との違いは。今回はそのことを中心に紹介する。



著者の紹介；大場大(おおば まさる)

1972年、石川県生まれ。外科医、腫瘍内科医。医学博士。金沢大学医学部卒業後、がん研有明病院等を経て東京大学医学部附属病院肝胆膵外科助教。2015年に退職し、がんのセカンド・オピニオン外来を主とした「東京オンコロジークリニック」を開設。著書に「がんとの賢い闘い方 近藤誠理論徹底批判」、「東大病院を辞めたから言えるがんの話」等がある。

本書の内容・感想

まず、「情報を正しく選択する」より引用しよう。

『日本のYahoo!(ヤフー)やGoogle(グーグル)で、「肺がん」で検索すると、正しい医療情報に上位ヒットできる確率は50%にも満たなかった。

検索すると、先端医療と称するクリニックや民間療法の広告がズラリと出てくるが、それらに関していうと、信用できる情報はなんと0%という結果であった。米国で同様に調査すると、信頼できる情報の上位ヒット率は、Yahoo!が72%、Googleが80%であり、それは米国のネット上では法的規制がしっかりと行き届いていることを意味している(J Thorac Oncol 2009; 4: 829-833)。

現状の日本では、インターネットはがん患者さんを間違った方向に誘導するリスクのある世界だということ、しっかり自覚しておいた方がよい。そうなると、患者さん一人ひとりが、身の回りにある膨大な情報の中から正しい情報を選択し理解するために、賢い「がんリテラシー」を自身で育まなくてはならないということである。』

では、信用してはいけないクリニックの広告とは。「それ、不当広告です」より引用する。

『具体的には、次のような表現がホームページ上に掲載されていたら、そのクリニックは怪しいと思ってみてください。

(例1) 治療の前で「がんが消えた」あるいは「縮小した」CT写真などを連載。(例2)「世界初の〇〇

療法」、「国内初の△△治療」。(例3)「都内屈指の治療件数」、「〇千例の投与経験」。(例4)「〇〇療法は抗がん剤と違って体にやさしく、効果が高い」。どれも、科学的な根拠が乏しい。さらに、不安を煽り、患者さんを間違った方向へ誘導しようとしている。

現行の「医療法」ではホームページは規制の対象ではないにしても、列記したような広告は、医療法第6条の5の規定違反に抵触し得るかも知れない。薬事法第68条、不当景品類及び不当表示防止法第4条に抵触する可能性もある。』

追記すれば、医療法第6条の5第3項で、「第一項各号に掲げる事項を広告する場合においても、その内容が虚偽にわたってはならない」と虚偽が禁止されている。第一項各号に掲げる事項とは、医師名、診療科名等であり、医療に関する広告には厳しい決まりがある。違反した場合、「6月以下の懲役または30万円以下の罰金に処する」とある。ただし、ホームページは、患者さんが情報を得るために自分の意思でアクセスするので、広告と見なされないというのが一般的な見解のようである。だとすれば、新たな方法で規制する必要があるのではなからうか。

最後に、「賢いリテラシーを育む努力をしましょう」より著者の思いを抄出する。

『残念なことだが、医師の性善説はかなり怪しくなっている。だから、患者サイドにある「きっと医師がベストを尽くしてくれるはずだから、すべてお任せ」というスタンスには、もはや限界があるだけではなく、むしろ大きなリスクがあるといっても過言ではない。

がんという病気には不確かなことが多く、いくら最善を尽くしても、必ずしも期待通りの結果に至らないことが少なくない。絶対に確実な治療やゼロリスクなどもない。だからこそ、それらを理解したうえで、過去には経験し得なかったような複雑さの中で、重要な意思決定が求められている。

世の中にある様々な情報と向き合ったとき、面倒くさがらずに、自身のがんのこと、治療のこと、死生感や哲学に至るまで、具体的な問いをもち続けてほしい。思考を停滞させてはいけない。

がんはある意味自己であり、がんに向き合うことは自分の人生と向き合うことに等しいような気がする。だからこそ、一人ひとりが賢い「がんリテラシー」を身に付けることで、自身の人生について、幸福について、賢く問い続けてほしいと心から願う。』

皆様も本書を通じて「がんリテラシー」をレベルアップさせ、「賢い患者」となり、素晴らしい人生を送って頂きたい。

理事 井上 林太郎